慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「同素反序語」から考える中国語教育の語彙指導について： 語形面の特徴に応じた指導法の一提案
Sub Title	Research of inverse morphemes words in Chinese vocabulary instruction : a proposal of teaching method based on the word forms
Author	浅野, 雅樹(Asano, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2022
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Keio Hiyoshi review of Chinese studies). No.15 (2022.) ,p.73 (30)- 102 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20220331-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「同素反序語」から考える中国語教育の語彙指導について
――語形面の特徴に応じた指導法の一提案――

浅 野 雅 樹

0．はじめに

中国語を外国語として学習する学習者にとって、ある言語成分をどのように並べるかという順序の問題は重要である。中国語では、例えば、“她爱我。”という文について、語順を入れ換えて“我爱她。”とすると意味関係が全く異なる文になることは当然よく知られている。“多吃”と“吃多”、“早来”と“来早”、“车来了”と“来车了”、“学一个星期”と“一个星期学”など、同じ成分を使用しながらも順序を入れ換えることで、その共通性をある程度は保持する一方で、文法的意味の面で若干の差異が生ずる例は多い。このように文法学習で、ある成分の順序の問題、つまりどちらを前に置き、どちらを後ろに置くのかということに対する理解はあらゆるレベルの学習者にとって不可欠である。そのため、中国語の検定資格試験などにおいて、順序を問う問題形式は常用されている。

このような順序の問題は上述した文法だけではなく、語彙についても存在する。現代中国語における大半の二音節語は、二つの形態素をそのまま組み合わせて構成する合成語である。合成語の中でも、実在的な意味を持つ二つの形態素から構成する複合語については、例えばAとBという二つの成分を、AB或いはBAと並べて語を構成するこ

とになる。その一部には、AB と BA という順序が逆転する二つの語が存在する現象が見られる。代表的な例として、“适合・合适”、“产生・生产”、“科学・学科”などがよく知られている。本稿ではこのような語の関係性を「同素反序語」と称す。これは語彙論における語形面の特徴の一つとして認識できる。さらに語義面の関係を見ると、2語には同義性や類義性が高い例が多い一方で、中には語義の差異が大きいものや、語用面での特徴だけに差異が見られる例など、様々なタイプが存在している。

本稿では、現代中国語における同素反序語を取り上げ、主に日本語母語話者の中国語学習者に対する語彙指導において、教育の実践現場に応じた効果的な指導の内容と方法を見出すことを目的とした考察を行なう。さらに、この同素反序語の事例や関連する語彙論的知識を応用し、日本語母語話者の学習者を対象とする語彙指導全般について論考する。

1.「同素反序語」に対する研究

同じ形態素から構成される順序が異なる語は、中国語で“倒序词”、“颠倒词”、“同素反序词”、“同素异序词”、“同素逆序词”などと称される。これらは、中国における語彙論の研究領域で以前から注目を浴びている。通時的な観点から歴史的にどのような語形の変化が見られるのかという点を主題とした多数の研究論文が発表されている。さらに、語彙交流史といった日本語など他言語の語彙との関係性を主題とした研究のほか、一般辞書における語義記述についての研究も見られる(1)。また主に現代中国語の事例を対象にして、音声、語構成、品詞、語義、さらに語用的な特徴を指摘する考察や定義の問題に対する論考も多く見られる(2)。本稿で取り上げる教育面での同素反序語に対する研究としては、薄家富（1996）、刘枫（2007）、叶长荫（2001）等がある。主に品詞や複合語としての語構成、語義の面での共通性や類似性

に従い類別化がなされている。また、とりわけ近年は中国の大学に提出された、対外漢語教育における「同素反序語」をテーマとした修士論文が数多く発表されている。中国語の規範的な一般辞書である《现代汉语词典（商务印书馆）》や、HSK（漢語水平考試）の語彙のガイドラインである《汉语水平词汇与汉字等级大纲》を資料とした調査が行われ、同素反序語が具体的にどのくらいの数があるのかという言語現象は、おおむね明らかにされている。また、対外漢語教育用の中国語の教材で明示されている同素反序語に対する調査もあり、教育の場で導入されている事例についても明らかになっている。

“减轻”—「軽減」、“黑白”—「白黒」といった“AB（中）”と「ba（日）」[(3)]という二つの逆転した形式の語が、中国語と日本語の二言語間の現代語の語彙に存在する。そのため、日本語の漢語語彙の語形との比較、対照研究や個別の事例に対する調査分析を中心とした研究が見られる[(4)]。とりわけ中国国内においては、通時的な観点からの研究を含めると、中日両言語に対する同素反序語に関する多くの論文が発表されている。また近年、日本において発表された研究論文としては馬雲（2014）等があり、中国語と日本語の関係性について、用例一覧の提示のほか、意味や品詞面での相違など様々な面からの考察がなされている。

これらの現象については、中国語学習の初期の段階で、常用度が比較的高い“介绍”—「紹介」、“和平”—「平和」などの例が出てくるため、一つの明示的学習項目として指導を行うことがあると言える。このような観点から、日本語母語話者の中国語学習者を対象とした中国の対外漢語教育における同素反序語の語彙指導についての研究も見られる。李冰（2008）、娄雪儿（2013）、林楠（2016）等においては、主に母語の日本語による干渉から引き起こされるエラーを例示して、指導の内容や方法に関する提言がなされている。

2．語彙指導における「同素反序語」について

大学などで展開される中国語教育は通常、授業用テキストを中心に進めるのが一般的である。その中で、語彙指導はテキストの会話文や読み物の中に出てきた語を「新出語句（語釈）」などの形でまとめて表示することが多い。通常は、「学習対象語（新出語句）―ピンイン―訳語（日本語）」という枠組みにて、形式（語形式）、音韻情報、意味情報のみを学習者に示している。ただ、中国語でよく言われる“遇词讲词”(5)という傾向が全般的に強く、とりわけ中級レベル以上の大多数の学習者は、所謂「付随的学習」により語彙の学習や習得をしていると言える。学習者の語彙力の向上を目指すのであれば、テキストにおける語の導入について、一定程度は語の語彙的な特徴や性質に従うことが必要であるとの見解を筆者は持っている。さらに、日本の大学等の中国語教育における語彙指導においても、所謂「語彙論的（体系）知識」を明示的学習項目として、文法事項とある程度は同列に扱うのが望ましいと筆者は考えている。「ピンイン」や「訳語」以外にも、有益な語彙情報は存在している。語彙論における「語形」、「語義」、「位相」、「“搭配”（コロケーション）」、「語の体系性」、「語の歴史」、「熟語」などの様々な面での知識が学習事項として認識できる。

このような語彙学習を中心とした授業用のテキストを考案し、その実用化に向けての可能性について筆者は探求している。そのためには、まず一つ一つの事項に対して、語彙論の見地から体系的な理解をした上で、指導の実践の場における活用についての考察が前提となる。そして、これらの事項のなかで、日本語母語話者の学習者にとって有用性が高いものを選択しなければならない。さらに、優先的にテキストに明示する事例を確定した上で、配列や順序を整えるといった課題に取り組む必要が生ずる。本稿で取り上げる同素反序語は学習者にとって、このような語彙に関する学習事項の一つとして見なすことができ

る。

本稿では、前節で挙げた先行研究における成果を土台として、日本語を母語とする学習者に対する日本の大学等における中国語教育の語彙指導に関わる考察を行なう。同素反序語の関係性は大きく分けて二つの側面から考えられる。一つは、現代中国語において存在する、例えば“语言”と“言语”、“产生”と“生产”、“开展”と“展开”などである。これらは語彙指導において、語を構成する形態素の結びつきが反対になる１組の語として見なされ、主に類義語となる例が多い。もう一つは、前節でも例示した中国語と日本語の二言語における語の関係性である。例えば“介绍”—「紹介」、“和平”—「平和」、“减轻”—「軽減」など、中国は“AB”、日本語は「ba」という語構成を持つものである。本稿は中国語の語彙指導についての考察を行なうという理由により、主に前者の中国語において存在する同素反序語の関係性を対象とする。中国語と日本語の二言語における語の一部がなぜ反転するのかという観点からの考察は行わない。ただ、日本語母語話者の学習者にとっては“语言”と“言语”、“产生”と“生产”など、中国語の同素反序語を学習や習得する際は、必然的に相当する日本語の語彙の干渉を受けることになる。そのため、学習者の心的辞書における語という位置づけで、日本語の同形語についても必要に応じて考察の対象に含める。日本語母語話者の学習者に対する語彙指導において、同素反序語は明示的学習項目として導入する余地が十分にあると筆者は考えている。この点を論証することを目的として、以下で事例を挙げながら、語の難易度や類義性、構成要素などの側面からの語彙論的考察を行なう。

３．対外漢語教育における「同素反序語」に対する認識について

本稿で論ずる同素反序語は語彙論の中でも、「語形」の範疇に属す

表１

表示頁	「語形」に関する事項
p２	构词成分上的联系「語を構成する成分の関係性」
p４	结构类型上的联系「構造の類型についての関係性」
p17	原有的单音节词向双音节词靠拢「元々あった単音節語の二音節語化」
p19	汉语缺少词形变化「語形変化が少ない中国語」
p32	构词单位「語構成の単位」
p33. 34	单纯词「単純語」
p34	合成词（合成词的构造类型）「合成語（合成語の構造と類型）」
p53	语音形式方面，叠音词、拟声词、轻声词「語の音声形式、重ね音語、擬声語、軽声語」
p116	同音词的类型：同形同音词、异形同音词「同音語のタイプ：同形同音語、異形同音語」
p123	同素词：同序同素词、逆序同素词「同素語：同序同素語、同素反序語」
p129	熟语「熟語」

る事項の一つである。語形面における事項としては、「語の音節数」、「語構成」、「日中同形語」などが中心的である。教育指導の面から同素反序語を見た場合、語彙論における「語形」の一つの指導項目として位置づけをするのが適当である(6)。

中国の主に大学で中国語を学習する留学生向けの教材である万艺玲著《汉语词汇教程》では、語彙論における様々な学習事項が体系的に示されている。表１はこの《汉语词汇教程》における「語形」に関する語彙情報と判断できる事項をまとめたものである(7)。

表１にあるような語形に関する語彙情報が、日本で使用される初級或いは中級テキストに明示的学習項目として導入されることは非常に少ない。そのため、教師が学習者に上記のような事項について、明示的な指導を行なうこともほとんどないと推測できる。学習者の語彙習得や語彙力の向上のためには、このような語形に関する事項をすべて体系的に取り入れることを前提として、語彙指導を行うのが理想的である。しかし、一般的な教育の実践現場における指導内容の分量には

限りがある。そのため、教師は優先順位を定め、その中から重要度が高いものを必須事項として選定し、段階的な導入が求められる。

本稿で取り上げた同素反序語は、表１の中では、“同素词”という見出しで提示がある。同書では、さらに“同序同素词”と“逆序同素词”に分類し、事例を挙げて説明がなされている。“逆序同素词”「同素反序語」については、さらに語義の面から“等义”（例：“代替・替代”“阻拦・拦阻”など）、“近义”（例：“洗刷・刷洗”“安心・心安”など）、“异义”（例：“事故・故事”“黄昏・昏黄”など）に分け、それぞれのタイプについて事例を挙げながら２語の相違を記述している。また“同素词的运用”という見出しで、同素反序語の修辞上の効用についての記述もある[(8)]。

また、方绪军（2008）《对外汉语词汇教与学》では、対外漢語教育の語彙指導における“难词”として、（一）虚词（二）近义词（三）逆序词（四）不对称的反义词（五）动词、形容词重叠（六）离合词（七）趋向动词（八）量词を挙げている。この中の（三）逆序词というのは本稿で言う同素反序語のことである。さらに語義の面から“有些逆序词的词义相近”と“有些逆序词差别较大”という二つのタイプに分け、前者には“演讲・讲演”、“式样・样式”、“心细・细心”などが挙げられている。また、後者は“和平・平和”、“动摇・摇动”、“产生・生产”などの例を挙げている。さらに、“究竟哪些逆序词是相近的，哪些是差异较大的，学生往往难以把握。”「いったいどのような同素反序語の語義が近く、また差異が大きいのはどのようなものなのか、学習者にとって理解が難しいことがよくある。」という記載がある[(9)]。このように同素反序語は語彙論の語形に関する重要な学習事項であるとの認識が、中国の対外漢語教育に従事する一部の研究者や教師にあることがうかがえる。

4．ガイドライン、テキスト、辞書における「同素反序語」について

中国語の語彙研究や対外漢語教育の語彙指導の面で注視される同素反序語であるが、具体的にどのような事例があるのかという問題についても、すでに明らかにされている。調査対象を中国語の語彙全般に定めれば、相当な数が存在すると言えるが、これを対外漢語教育の語彙指導の対象となる語に限定すると、数は大幅に減少し、一定数に抑えられる。先行研究においては、《汉语水平词汇与汉字等级大纲》、《HSK 词汇大纲》、《现代汉语词典》などを調査対象として、これらの中に収録されている同素反序語について言及がある。刘枫（2007）では、《汉语水平词汇与汉字等级大纲》に対して、合計52組、104語を抽出して考察が行われている[(10)]。李爽（2016）には、《HSK 1－6 级词汇表》に対する調査があり、4級から6級まで9組が収録されるとの記載がある[(11)]。张其昀（2002）は《现代汉语词典（第三版）》に対する調査を行い、765組の同素反序語の一覧を提示している[(12)]。そのほか、対外漢語教育において使用される主要な教材に対する調査も見られる[(13)]。また、中国では、《同素异序词应用词典》が出版されている。同書は対外漢語教育向けの学習辞書ではないが、1200組余りの同素反序語を見出し語として収録している。

日本中国語教育学会が公開する「中国語初級段階学習指導ガイドライン（2007年）」には、第1表（600語）、第2表（400語）の計1000語が示される。その中の語彙を調査したところ、収録語の一定数に同素反序語が存在することが明らかとなった。次項に示す表2、表3について、表内の数字はガイドラインにおける表示番号、括弧内に示したのはガイドラインに収録されていた語の同素反序語と見なせる例である[(14)]。

表2と表3から分かる通り、計39語については同素反序語が存在する。

表 2

37 不要（要不）	53 出发（发出）	103 对面（面对）	131 刚才（才刚）	151 故事（事故）
168 好看（看好）	180 互相（相互）	192 回来（来回）	206 健康（康健）	273 马上（上马）
292 明天（天明）	316 年纪（纪年）	320 牛奶（奶牛）	324 暖和（和暖）	343 前年（年前）
341 铅笔（笔铅）	354 热闹（闹热）	463 喜欢（欢喜）	533 音乐（乐音）	535 应该（该应）
550 愿意（意愿）				

「第 1 表分」

表 3

18 比较（较比）	49 答应（应答）	79 发生（生发）	103 工人（人工）	116 合适（适合）
125 护照（照护）	135 鸡蛋（蛋鸡）	170 科学（学科）	192 力量（量力）	207 旅行（行旅）
245 青年（年青）	277 事情（情事）	283 蔬菜（菜蔬）	293 所有（有所）	308 外国（国外）
339 熊猫（猫熊）	364 语言（言语）	379 整齐（齐整）		

「第 2 表分」

5．類義語となる「同素反序語」に用いる弁別法について

学習者の語彙学習において、「類義語」は非常に重要であり、指導の面でも教師が常に注視しなければならない事項の一つである。同素反序語は 2 語間の形式的な類似性を持つものであるが、語義の面においても共通性や類似性が高く、その多くが類義語と見なされる[(15)]。主に中国で使用されている類義語辞典を調べると、見出し語となる類義語の中で、同素反序語である例が一部存在する。赵新、李英主编《学汉语近义词词典》では1030組の類義語が収録されているが、そのうち 6 組が同素反序語であり、全体の約0.5％を占める[(16)]。また、佟慧君、梅立崇主编《汉语同义词词典》は、2168組の類義語を収録しているが、そのうち41組で（表 4 を参照）、全体の約1.9％を占める[(17)]。類義語全体における比率は高くないが、類義語となる同素反序語は語形と語義の両面において共通性や類似性が高く、他の類義語よりも全体的にその弁別が難しいと考えられる。

表４　《汉语同义词词典》における「同素反序語」の例

半夜 夜半	彩色 色彩	达到 到达	答对 对答	斗争 争斗	奋发 发奋
感情 情感	过路 路过	合适 适合	和缓 缓和	互相 相互	花眼 眼花
欢喜 喜欢	会意 意会	魂灵 灵魂	觉察 察觉	开展 展开	来往 往来
冷清 清冷	连接 接连	粮食 食粮	名声 声名	难为 为难	配搭 搭配
千万 万千	青年 年青	生平 平生	蔬菜 菜蔬	算计 计算	贴补 补贴
通畅 畅通	途中 中途	细微 微细	兄弟 弟兄	修整 整修	延迟 迟延
演讲 讲演	羊羔 羔羊	摇动 动摇	要紧 紧要	语言 言语	

表５

「弁別法」	使用例数	「弁別法」	使用例数
词义侧重	16組	使用频率	７組
词义轻重	４組	语法功能・词性	14組
感情态度	２組	组合能力	13組
语体色彩	18組	构词	16組

同素反序語の類義語が他の類義語と比べて、学習上難解である一つの要因として、区別を説明する際に使用する類義語弁別法が想定できる。そこで、表４の《汉语同义词词典》における41組の例に対して使用されている主要な弁別法を調べたところ、上記の表５のような結果が得られた。

同書の全体的な弁別法の使用と比較すると、同素反序語の41組に対して使用される弁別法にはいくつかの点で特徴が見い出せる。まず、“词义侧重”「語義の重点」という意味の面での弁別法の使用割合が低いことが指摘できる。同書における見出し語全体に対する“词义侧重”の使用割合は、おおよそ８割を占めるが[18]、同素反序語に限れば、41組中16組のみで、半数に満たない程度である。類義語弁別法は意味、文法、語用の大きく三つの面に分類できるが、中でも意味面における弁別法が中心的な役割を果たすものであると言える。意味面の弁別法の中でも、“词义侧重”「語義の重点」は類義語辞典で一般的に最も多用され、非常に重要な弁別法であると言える。とりわけ形態素

が具える字義についての知識を持ち、字義から語義の推測が可能な日本語母語話者の学習者にとっては、本弁別法の必要性が極めて高く、また初級レベルの学習者に対してもある程度は適用できる。一方で、同素反序語の類義語の場合、“AB・CB”のような語形式を持つ類義語と比べると、異なる形態素の部分からそれらの違いの弁別をすることが難しい。同じ類義語でも、“AB・CB”というタイプについては、語の構成要素の異なる形態素である“A”と“C”の方に着目することができる。“词义侧重”の方法を用いて、一方は語義の面で“A”に重点があり、もう一方は“C”に重点があるとの理解を促すことが容易である。しかし、同素反序語は、このような方法で弁別を行なうことが難しく、必然的に使用率の低下を招くことが考えられる。また、表5から分かるように、同じ意味面の弁別法である“词义轻重”「語義の軽重」の使用についても、42組中4例（約9.5％）だけであり、全体の使用率が2割強[18]であるのと比較すると、低いことが分かる。

一方、“语体色彩”「文体的ニュアンス」、“使用频率”「使用頻度」、“词性·语法功能”「品詞・文法機能」、“构词”「造語」といった語用面や文法面における弁別法の同素反序語に対する使用率は、それ以外の類義語に対するものより高くなる傾向が見受けられる。これは、意味面からの弁別が難しいため、その他の範疇の弁別法が使用されているとの見方が可能である。このような文法面や語用面での弁別法の多用という点から、日本語母語話者の学習者にとって同素反序語の類義語は弁別がより一層困難になるとの理解ができる。

6．語彙指導において導入する「同素反序語」の事例とその難易度について

6.1 「同素反序語」に対する難易度の測定

教育指導の実践の場、とりわけ中級以上の授業では、読解や会話、リスニングといった言語の技能力の向上を目的としたテキストを使用

することが多い。言語の要素である語彙については、テキストに示される文章や対話文に応じて付随的に導入し、一つ一つの語を単体としてリストアップする。学習者はこのようなテキストにおける「新出語句」の箇所に並べられた語を学習し、語彙量を増やすことになる。とはいえ、これらは決して語の語彙的な性質や特徴、または難易度や使用頻度によって導入、配列がなされているわけではない状況が指摘できる。学習者の語彙力の向上を目的とした語彙中心の指導を目指すのであれば、テキストへ導入する語や教育実践の場で取り上げる語の事例については、語が持つ語彙論的な性質や特徴を含めた視点が必要であるとの見解を筆者は持っている。3節で述べたように同素反序語は語形面での学習事項と見なせるが、語彙指導の実践の場で恣意的にその中の事例を選択することは相応しくない。優先的かつ重点的に取り上げるべき事例を慎重に判断した上で、選択することは教師側の課題の一つである。その際に語彙的性質や特徴に基づき測定した個々の語に対する「難易度」に依拠することが可能となる。本節では、漢字や日本語における漢語語彙の知識を持つ日本語母語話者の学習者にとって重要度が高い同素反序語の事例について、その難易度の側面から、以下で分類と考察を行なう。

馬雲（2014）、刘静・王志勤（2004）、马林峰（2019）、娄雪儿（2013）等では、日本語と中国語の語彙における同素反序語に対して、主に両言語の関係性の面から分類がなされている。前掲の先行研究を参考にすると、表6のようにその関係性をまとめることができる。

語の難易度の測定は極めて難しく、様々な角度からの指標があることはよく知られている[20]。本稿では、まず中国語の反序語となる2語の間に類義性があるか否かという点に基づき判別する。類義性があるものは難易度が高く、類義性がないものは難易度が低いと判別する。さらに日本語母語話者の学習者にとっての難易度を測定するという目的により、上の表6に示した同素反序語のタイプに応じて、中国語と同形になる日本語の漢語語彙との関係性に依拠した難易度の測定を試

表6[19]

中国語	日本語	例
AB ・ BA	ab ・ ba	“国王・王国”—「国王・王国」など
AB ・ BA	ab	“担负・负担”—「負担」など
AB	ab ・ ba	“声音”—「声音・音声」など
AB	ab	“日期”—「期日」など
AB ・ BA		“集市・市集”など
	ab ・ ba	「茶番・番茶」など

みる。このように類義性と日本語との関係性の二点を主な指標として、難易度を四段階（低→中→高→最高）に分けて判定する。前述した通り、本稿は中国語教育における同素反序語に対する指導を主題としているため、上の表６において中国語自体にその関係性が成立する上から１行目の（“AB・BA”—「ab・ba」）、２行目の（“AB・BA”—「ab」）、及び５行目の（“AB・BA”—「日本語無し」）の三つのタイプの事例に限定して、以下で考察を行なう。また、本節において提示する各語の意味・用法については主に『中日辞典（小学館）第三版』、『日中辞典（小学館）第三版』、『三省堂国語辞典（第七版）』における記述を参考にして判断した。

6.2 “AB・BA”—「ab・ba」タイプ（“中” 2—「日」2型）

①“国王・王国”—「国王・王国」“蜜蜂・蜂蜜”—「蜜蜂・蜂蜜」
“产物・物产”—「産物・物産」

上の①は中国語の“AB”、日本語の「ab」、中国語の“BA”と日本語の「ba」がほぼ同じ意味・用法であると見なすことができるタイプである。これらは中国語の“AB・BA”の類義性の有無を問わず、日本語母語話者の学習者にとっての難易度は「低」と判定できる。学習者が日本語の知識を応用し比較的容易に学習できる典型的な例であり、母語からの正の転移が生ずる蓋然性は高い。

②“路线・线路”—「路線・線路」“色彩・彩色”—「色彩・彩色」

前述した①と異なり、中国語と日本語を比較した場合、一方の語の意味・用法について、一定程度の相違が認められるタイプが存在する。

上の②の二つの例は、中国語の“AB・BA”が類義性を具える。さらに日本語との関係を見ると、一方に意味・用法の相違が認められる。中国語の“路线”と日本語の「路線」はほぼ同義であると見なしてよいが、“线路”と「線路」の方は、相違面が大きい。また二つ目の例も同様に中国語の“色彩”と日本語の「色彩」はほぼ同義であると見なしてよいが、“彩色”と「彩色」の方は同義ではない。このようなタイプの同素反序語については、日本語の漢語語彙からの干渉を受けやすいため、難易度は「高」と判定する。

③“粮食・食粮”—「糧食・食糧」“痛苦・苦痛”—「痛苦・苦痛」

上の③の二つの例は、中国語と日本語の反序語の関係性がさらに複雑であるとの見方ができるタイプである。まず中国語の反序語に類義性が強く、日本語の方もほぼ同じ意味関係を持つが、主に語の語用的な特徴が中日両言語の間で異なる。まず使用頻度の面で、中国語の方は“粮食”が高く、日本語の方は「食糧」がより高いという相違がある。また中国語の“粮食・食粮”には、比喩義、抽象・具体義等の面での相違があるが[21]、日本語の方はこのような語用面での意味に関する明確な相違は見られない。次の例について、中国語の“痛苦”は使用頻度が高く、また話し言葉か書き言葉を問わず使用されるが、“苦痛”は書面語的なニュアンスを持つ語で、使用頻度は高くない。一方、日本語の方は反対に「苦痛」の方が使用頻度はより高く、よく使用する語である。このように、中国語の反序語としての使い分けの難度に加え、主に語用面の僅かな差異により中国語と日本語の同形語が反対の関係になるタイプについては、難易度は「最高」と判定する。

④“人文・文人”—「人文・文人」“理事・事理”—「理事・事理」
“手下・下手”—「手下・下手」

④の二つの例も、前述した②と同じで、一方の語だけが両言語間において異なる意味・用法を持つタイプである。中国語の“人文”と日本語の「人文」はほぼ同形同義であると見なせるが、“文人”と「文人」は、「文化人」全体を指す中国語の“文人”の方が意味範囲はかなり広い。また、次の例は中国語の“事理”、“手下”と日本語の「事理」、「手下」は共通点が多いが、“理事”[22]と「理事」、“下手”と「下手」は意味での相違面が大きい。しかし、これらには中国語の“AB”と“BA”には意味面での距離間があり、類義性は認められない。このようなタイプについては、日本語との関係性から見れば難易度は高いが、類義性がない分、上の②や③と比べるとやや容易な例であると見なせるため、難易度は「中」と判定をする。

6.3 “AB・BA”—「ab」タイプ（“中” 2—「日」1型）

次に中国語は“AB・BA”という同素反序語が存在するが、日本語は一方の語形しかない“AB・BA”—「ab」に対して、6.2と同様にいくつかのタイプに分けて、その難易度について考察を行なう[23]。

⑤“负担・担负”—「負担」“展开・开展”—「展開」
“讲演・演讲”—「講演」

上の⑤の例は、中国語の同素反序語に類義性がある例である。その一方の語形が日本語にも存在するが、日本語の語の意味・用法は、中国語の2語のどちらとも完全に同一ではなく、意味・用法において部分的に関連性があるものである。上の“负担・担负”—「負担」について言えば、日本語の「負担」には中国語の“负担”と“担负”がそれぞれ示す一部の意味・用法を持っている[24]。次の二つの例も同様、

中国語の同素反序語の間で類義性があり、しかも日本語には一方の語形しかない。そのため、日本語母語話者の学習者は日本語にある方の語形を多用してしまうなどの負の転移が生ずる可能性が高く、難易度は「高」と判定する。

⑥“言语・语言”—「言語」“素朴・朴素”—「素朴」

上の例は、⑤と同様に中国語の同素反序語に類義性が認められる例である。その一方の語形が日本語にも存在するが、日本語の「ab」が同形の“AB”の方よりも、反対の“BA”の方に近い例が一部存在する。⑥の二つの例について言えば、中国語の同素反序語である“语言・言语”は類義性がある。中国語の“言语”はどちらかと言えば専門用語であり、日本語の「言語」は中国語の“语言”の方により近いと見なすことができる。下の例も同様に中国語の“素朴・朴素”は類義性があるが、中国語の“素朴”はどちらかと言えば専門用語であり、日本語の「素朴」は、中国語の“朴素”の方により近いと見なすことができる。このように日本語にある語形が中国語の同素反序語における反対の語形の方に相当する場合は、中日両言語の関係性が⑤よりもさらに複雑に交錯する。そのため、学習者にとって日本語からの干渉を最も受けやすくなり、さらに難易度も上がるので、これらのタイプの難易度は「最高」と判定する。

⑦“欢喜・喜欢”—「歓喜」“外出・出外”—「外出」
“人工・工人”—「人工」“融通・通融”—「融通」

上の例は⑤や⑥と異なり中国語の同素反序語に類義性が認められないタイプの例である。上に示した“欢喜”と「歓喜」、“外出”と「外出」、“人工”—「人工」のように同形の語の間に、意味・用法に相違がない場合は、誤用につながることは少なく、日本語からの干渉を受

けにくいタイプである。難易度は「中」と判定する。一方で、“融通・通融”―「融通」については、日本語の「融通」は、語形が反対の“通融”の方と意味が近く、同形の“融通”とは相違面が大きいといった特殊な例も一部存在する。このようなタイプについては、中日二言語の間に複雑な関係性が認められるので、難易度は「高」と判定する。

6.4 “AB・BA”―「日本語なし」タイプ（“中”2―「日」0型）

ここで挙げる同素反序語は、上述した二つの類と異なり、日本語の語彙にはない。そのため、日本語からの干渉はなく[25]、他の日中異形語と同様に、語形の面でゼロの状態から学習することになる。以下、類義性の面から二つに分けて、その難易度を設定する。

⑧“集市・市集”　“刚才・才刚”
“应该・该应”　“畅通・通畅”

上の例は、日本語の語にはない語形であるが、2語の間には類義性が認められる例である。日本語からの干渉はないが、語形と語義の両面での類似性があり、区別が難しいタイプであると見なし、難易度は「高」と判定する。

⑨“手枪・枪手”“用功・功用”
“办法・法办”

上で示した⑨の例は、⑧とは異なり2語の間には、類義性が認められない例である。日本語からの干渉はなく、語義の面での類似性が少なく、区別が比較的明確になる例であるとの見方ができる。しかし、反序関係という語形面での区別は注意を要するタイプであるため、難易度は「中」と判定する。

6.5　難易度に依拠した同素反序語の導入について

大学などの中国語教育の実践現場では、ある特性を有する語彙の中で、個々の事例をすべて一律に導入するのは難しい状況にある。そのため、学習者にとって学習と習得が困難なタイプを見極め、明示的な指導内容を精査する必要が生ずる。語彙指導において同素反序語を導入するにあたり、多数の事例の中から一部を優先的に取り上げ、それらを集中的に学習できる仕組みを整えることが教師側の課題の一つとなる。このような重要な事例の判別と選択の際、上述したような難易度の高低に依拠することが可能となる。日本語母語話者の学習者に対しては、「低」や「中」と判定した事例より、「最高」或いは「高」と判定したタイプを優先的に教える方針の下、指導を行なうのが妥当である。当然のことながら、語の難易度は様々な角度からの測定方法が存在するため、容易に定めることはできない。ただ、本節で行なった難易度の設定は同素反序語の導入にあたり、一つの指標とすることができる。

7.「同素反序語」を応用した語彙指導の方法について

本稿で取り上げた同素反序語は、“AB・BA”というように語順が逆転する２語を類義語や反義語と同様、語彙指導において２語１組で導入したり、教材に明示したりすることができる。加えて、同素反序語を語彙論における知識として応用することで、より効果的な語彙指導の方法を学習者に提示することが可能である。本節では同素反序語を基点として、語形や語構成に対する学習者の意識を強化することを目的とした語彙指導の一方法について探求する[(26)]。

現代中国語の単語は二音節語の割合が高く、主流である。さらに二音節語の中でも、二つの形態素から構成される所謂「合成語」が大多数を占める。これらの合成語に対して、中国語の語彙学習において、複音節の単語を総合的に理解し学習する方法と、単語の構成要素であ

る形態素に分解した上で、理解し学習する方法がある[27]。後者の視点により語を分析するならば、言うまでもなく単語を構成する形態素に対する理解や注意が必要となる。二音節語に限って言うならば、単語の構成要素である形態素がその前に置かれるのか、或いは後ろに置かれるのかという形式上の一つの事項が重要となる。同素反序語はまさに前か後ろかという点で反転する語であるが、この現象を活用して、ある一つの形態素が二音節語の前に位置する単語と、後ろに位置する単語を例示するという語彙指導の方法を提案したい。目標言語の単語を一つの単体として、母語を用いた訳語と一対一の関係性のみで学習するスタイルを用いる学習者が多い。このような状況下で、語の語形や語義もしくは位相面での体系性を具えた事項に応じた学習や指導が教育の実践現場での課題であることはよく認識されている。一つの語が持つ語彙的な性質や特徴への理解を深める学習、つまり「語彙の深さ」の面での学習目標に応じ、既に一定の語彙量を有する主に中級レベル以上の学習者を対象とした指導方法について、以下事例を挙げながら考察を行なう。

ここでは、前節で述べた中国語の同素反序語の例の中で、主に日本語にはそのうちの一つの語形が存在するタイプを取り上げる。中国語“AB・BA”、日本語には「ab」のみという関係性を持つ例において、日本語の語彙には無い方の語形“BA”に従い、その語の構成要素である前に置かれる“B”、後ろに置かれる“A”という形態素に着目する。まず形態素の“B”が前に置かれる二音節語について、常用語彙として学習の必要性が高い語彙を列挙する。そして、日本語母語話者の学習者にとって最も転移が生じやすい日本語の漢語語彙に相当する語形があるかどうかということを調べる[28]。同様に形態素の“A”が後ろに置かれる常用語についても例示する。もし、日本語にない語形の中国語が多く存在する場合や、或いは同形の語があったとしても、語義の面での相違が大きい語がある場合は、このような語彙の導入方法の有用性がより高まると判断する。以下、“应答・答应”―「応答」

などの事例により、本方法について考えてみたい。

①“应答・答应”—「応答」

中国語の同素反序語である“应答・答应”について、“应答”は日本語の「応答（する）」とほぼ同じ意味で使用される。“答应”は日本語にはなく、また語義についても「応答（する）」という意味の他、「承知する」という主要な意味があり、日本語母語話者の学習者にとっては難解な語であると見なせる。この“答应”という語を基点にして、語形面での学習者の意識を活性化させることを目的とし、“答”が二音節語の前に置かれる語及び“应”が二音節語の後ろに置かれる語を例示し、同時に学習することが可能である。

表７

“答”が前	日本語	“应”が後	日本語
答案	○	反应	○
答辩	○	供应	○
答复	×	适应	○
答卷	×	相应	○
答问	×（反序語）	响应	×
答谢	×	照应	○

このような方法で中国語の“答应”の語形面での関連用語をリストアップして、もし日本語の語形に存在しない例が多数を占めれば、語彙指導において使用する有効性はより高くなるとの見方ができる。表７は中国語の語に対して、日本語の語彙にあるものは「○」、ないものは「×」を付した（以下、表８・表９・表10も同様である。）。“答”が前にある例については、おおよそ半数が日本語にはない。また表中の“答问”については、中国語“问答 - 答问”と日本語「問答」という関係性が成立するが、これは“答应・应答”—「応答」と同じである。このように日本語との関係性から「反序語」となる語が

存在する時も、本方法の有用性が高まると言える。一方で、“应”が後ろにある例については、ほとんどは日本語の語形にも存在するため、“应”が後ろに位置する二音節語の学習は日本語母語話者の学習者にとっては、全体的に学習の負担は少ないと判断できる[29]。

②“累积・积累”—「累積」

中国語の“累积・积累”について、2語とも日本語の「累積（する）」とほぼ同じ意味で使用される。しかし、日本語には無い方の“积累”の方が使用頻度は高く、意味範囲もやや広い。そのため、日本語母語話者の学習者にとっては難解な語であると見なせる。この“积累”という語の学習を通して、“积”が二音節語の前に置かれる語と、“累”が二音節語の後ろに置かれる語を例示し、同時に学習することが可能である。

表8

“积”が前	日本語	“累”が後	日本語
积存	×	带累	×
积分	○	挂累	×
积极	○	连累	×
积久	×	牵累	×
积欠	×	受累	×
积压	×	拖累	×

上の表8からうかがえるように、“积”が前に置かれる中国語の二音節語の例の中で、半数以上が日本語にはない語形である。また“累”については、すべての例が日本語の語形にない[30]。そのため、“累”が後ろに置かれる語をまとめて学習することは、前出の①で示した“应答・答应”—「応答」の例と比較すると、有用性がより一層高く、日本語母語話者の学習者にとっては一定の効果があるものと判断できる。

③“讲演・演讲”—「講演」

中国語の同素反序語である“讲演・演讲”について、2語とも日本語の「講演（する）」とおおむね同じ意味で使用される。しかし、日本語にはない方の“演讲”の方が使用頻度は高く、意味範囲もやや広い。そのため、日本語母語話者の学習者にとっては難解な語であると見なせる。この“演讲”という語の学習を通して、“演”が二音節語の前に置かれる語と、“讲”が二音節語の後ろに置かれる語を例示し、同時に学習することが可能である。

表9

“演”が前	日本語	“讲”が後	日本語
演变	×	播讲	×
演唱	○	开讲	○
演出	○	听讲	○
演化	×	宣讲	×
演示	×	主讲	×
演说	○		
演戏	○		
演员	×		
演奏	○		

上の表9からうかがえるように、“演”が前に置かれる二音節語で常用語と見なせる例の中で、約半数が日本語にはない語形である。また“讲”については、“演”が前に置かれる語と比べると数は少ないが、やはりおおよそ半数が日本語の語形にはない[31]。したがって、“演”が前で、“讲”が後ろに置かれる語をまとめて学習することは、日本語母語話者の学習者にとって一定の効果があるものと判断する。

④“容许”—「許容」

①～③で示した三つの例とは異なり、“容许”—「許容」は中国語

自体に同素反序語が存在する例ではなく、中国語と日本語の二言語の間で反序関係にある。前述の①～③と同様、まず“容许”を基点として、“容”が前、“许”が後ろに置かれる二音節語を調べて見ると、表10に示すように、いずれも日本語にはない語形である例が大多数を占めていることが分かる。また、表10の“容受”は“容许”と同じように日本語の「受容」との関係性で反序語であり、その語形に注意する必要がある[32]。このように中国語自体に同素反序語の例がなく、中日二言語間の関係性のみで成り立つ例についても、日本語の語形にない例が多数を占める場合は、日本語母語話者にとって効果的な語彙導入の一つの方法と見なせる。

表10

“容”が前	日本語	“许”が後	日本語
容当	×	不许	○
容量	○	或许	×
容纳	×	兴许	×
容情	×	也许	×
容忍	×	应许	×
容受	×（反序語）	允许	×
容易	○	准许	×

授業用のテキストなどで語彙を一覧の形でまとめて付す場合、どちらかと言えば語義の面での性質や特徴に応じた視点に基づくのが一般的である。「スポーツ」、「中華料理」、「キャンパス用語」といったある内容に基づいた関連用語をまとめる表示法や、「動作、心理を示す動詞、形容詞」、「地名、人名を示す固有名詞」といった語の文法的意味に応じて語をまとめて示すことも多い。このような語義を重視した語彙学習の重要性が高いことは言うまでもない。しかし、その一方で、語の語形面での性質や特徴に応じた学習語彙の表示法に関する検討の余地もある。３節の表１で示したように語形面での主な事項としては

「語の音節数」、「語構成」、「日本語の漢語語彙との語形面での比較対照」などがあるが、これらの内容に応じたテキストにおける語彙の導入や表示法が考えられる。

本節での考察は、語を構成する形態素の順序という語形面での特徴に応じた表示法の可能性に言及したに過ぎない。実際に教育の実践現場で使用するためには、さらに多くの事例に対して精査と分析を進め、また試用を経て、学習者の語彙力の測定に関する検証を行なう必要もある[(33)]。但し、このような方法の実用化がなされ、語彙指導の一方法として定着することにより、中国語では言語形式において「順序」が重要事項の一つであるという原則に対する学習者の認識を強化させるという効用が見込める。

8．おわりに

以上、本稿では語形面での一つの特徴と見なす、同じ形態素から構成され順序が反対になる「同素反序語」について、主に日本語母語話者の中国語学習者に対する語彙指導の面から考察を行なった。「語彙の深さ」の側面からの語彙指導の充実、漢語語彙の知識を持つ日本語母語話者に対する語彙指導法の確立というマクロ的な視点からの目的に応じ、同素反序語という一つの事項について、先行研究における成果に基づき、その事例について提示や分類を行なった。また、指導の実践面での課題という見地を含めた上で、「類義語弁別法」、「学習者にとっての難易度」、「語を構成する形態素の順序」に関する調査と分析を通して、同素反序語を中国語教育における語彙指導に導入する意義について論述した。

一般的な中国語教育の実践の場で最も簡単な同素反序語の導入は、授業で使用するテキストの「新出語句」において、下記のように提示する方法であろう。

开展	kāizhǎn	繰り広げる、展開する	→展开
合适	héshì	ちょうどよい、適している	→适合
黄金	huángjīn	黄金、貴重な	→金黄

一つの語に対する語彙のネットワークに基づく関連用語は、同素反序語以外にも、「類義語」、「反義語」、「上・下位語」、「ある意味領域における関連用語」など数多く存在する。その中で、「同素反序語」を上記のように提示する効果を慎重に見極め、テキストにおける語釈の部分における語彙情報の提示という全般的な問題との整合性を図ることが必要となるが、この点については、今後の課題としたい。語彙量が豊富なおおよそ中級レベル以上の学習者は個々の同素反序語の多くをすでに学習済みである。このような状況の学習者に対して、さらに語彙論における体系的知識として、明示的に同素反序語を教えることができれば、学習者の多様な語彙学習ストラテジーの使用につながる効果も期待できる。また、学習者の語彙学習に対する全般的な活性化に対して一翼を担うことは、確信を持って述べたい。

注

（1）陆建丽（2010：149）には、「同素反序語」に対する研究を総括した以下の記述が見られる。

目前，对于同素逆序词的研究从内容来看，主要涉及古汉语同素逆序词研究、方言同素逆序词研究、现代汉语同素逆序词及其小类的细分研究、专著中同素逆序词的研究、国别化同素逆序词的比较研究等等。可以说，对同素逆序词的研究在广度和深度上都达到了一定的程度，但同时我们也发现对于对外汉语同素逆序词的教学研究并不多。

（2）张其昀（2002）は、現代中国語の「同素反序語」について、事例を一覧表の形で挙げるほか、語義、品詞、構造の面から体系的な分析を行なっている。曹炜（2004：238-247）では、“逆序词”の定義の問題についての論考がある。また、同書は“对海峡两岸同素异序词（台湾词语－大陆词语）”として137組の例の一覧を示している。

（3）本稿では以下、中国語の語句の提示には“(中)”、日本語の語句の提示には「(日)」を使用する。

（4）日本語では一般的に「反転語」や「鏡像語」と称す。また、日本における先行研究としては、竹中（1988)、中川（2012)、荒川（2018：157-159）において論考及び言及が見られる。

（5）曾立英（2021：4）は、対外漢語教育における語彙指導全般の問題に対し、以下のように指摘している。

> 在国际汉语词汇教学中，词汇教学存在系统性不足的问题，虽然学界有《汉语水平考试词汇与汉字等级大纲》做指引，有教材中的语境提示，但现在的词汇教学有着孤立讲解生词的倾向，习惯于“遇词讲词”，整个词汇教学显得比较零散，效率不高。

（6）日本中国語教育学会作成の「中国語初級段階学習指導ガイドライン（文法項目表)」は、語形についての内容と判断できる事項として、「漢字の単用」、「単音節語と複音節語」、「単純語・合成語」、「5種の複合タイプの合成語（主述・修飾・補足・動賓・並列)」を挙げている。

（7）表内の日本語訳は筆者によるものである。

（8）万艺玲（2000：126）には以下のような記載が見られる。

> 词义相近的同素词，运用到文章中，主要是为了避免用词呆板。同一个意思在文章中出现多次，可以用近义的同素词来表达。

（9）方绪军（2008：52）より引用した。日本語訳は筆者によるものである。

(10) 刘枫（2007）では、さらに52組の同素反序語である104語の《汉语水平词汇与汉字等级大纲》におけるレベルについて、「“甲级词”—17語、“乙级词”—29語、“丙级词”—26語、“丁级词”—32語」であるとの調査結果が示されている。また1組の2語が甲乙丙丁の同じレベルにある例は52組中16組で30.8％を占めるとのデーターが示されている。

(11) 李爽（2016：6）には、具体的に次の同素反序語とそのレベルが図表で示されている。

> “情感・感情”（四级・六级)、“对面・面对”（四级・五级)、
> “爱情・情爱”（四级・六级)、“产生・生产”（五级・五级)、
> “展开・开展”（五级・六级)、“导向・向导”（六级・六级)、
> “斗争・争斗”（六级・六级)、“自私・私自”（六级・六级)、
> “工人・人工”（五级・六级）

(12) 胡玮（2015）には、《现代汉语词典（第六版）》に対する調査がある。付録の表の形で786組の「同素反序語」を提示している。

(13) 路涵（2019）では、対外漢語教育用の主な教材に対する調査結果が示されている。１組の「同素反序語」がともに収録されている例について、《汉语教程》（北京语言大学出版社）が９例、《拾级汉语》（北京语言大学出版社）が２例、《发展汉语（第二版）》（北京语言大学出版社）が９例、《博雅汉语》（北京大学出版社）が18例の「同素反序語」があるとの調査結果を示している。

(14)「同素反序語」の存在の有無については、主に《现代汉语词典（第七版）》に依拠した。

(15) 刘枫（2007：42）には、52組の「同素反序語」の例について、41組は語義面で関係性が認められるとの指摘がある。一方、“出发・发出”、“动机・机动”など11例については、語義面の関係性がないとしている。

(16) ６例のうち、“合适・恰当・适合”、“年青・年轻・青年”の２例は、「同素反序語」となる１組の２語以外にもう１語が含まれ、３語が見出し語であった。

(17) 42例のうち、“奋发・发奋・发愤”、“演说・演讲・讲演”の２例は、「同素反序語」となる１組の２語以外にもう１語が含まれ、３語が見出し語であった。

(18)《汉语同义词词典》における類義語の見出し語に対する弁別法の使用状況については、拙稿、浅野（2011）を参照した。

(19) 表の形式と分類については、主に馬雲（2014：74）にて提示されている表に基づいた。

(20) 単語に対する文法論や語彙論的な指標による難易度の測定については、朱志平（2014：44）に難易度を数値化した詳細なモデルが示されおり、参照した。

(21)《汉语同义词词典：570》には、粮食：比喻用法较少见、食粮：比喻用法很常见，常说“精神食粮”といった記載が見られる。

(22) 中国語の“理事”には、日本語の「理事」のような役職を示す意味があるが、「事務的な処理をする、切り盛りをする」といった動詞的な用法もある。

(23) このタイプについては、馬雲（2021）で、詳細な調査結果と考察が行われており参照した。同稿では、中国語に２語、日本語に１語のみのタイプに対して、計375組の中国語を抽出し、その意味関係に

より「S 型（極めて近いもの）」が59組（16％）、「O 型（一部重なるもの）」が72組（19％）、「D 型（著しく異なるもの）」が244組（65％）というデーターが提示され、綿密な分類が行われている。

(24) また、「（任務を）引き受ける」といった動作・行為を示す意味・用法など、中国語の“担负”と“负担”が持つ意味項目の中で、日本語の「負担」にはないものもある。

(25) 語形の側面からの転移はないが、日本語母語話者の学習者の場合、事例によっては単語を構成する形態素義（字義）からの推測ができる例とできない例が存在する。

(26)「同素反序語」を通した語彙指導の方法について、刘枫（2007：44-45）は、“语素教学法和词本位教学法相结合”、“加强学生的语素序意识，强化字音和字形的联系”、“三步教学法”の三つの方法を提起している。

(27) 高燕（2008：20）には語義の意味理解の方法について以下のような記述があり、参照した。

> 整体法就是不对词语本身进行内部的构成分析和理据分析，只是把词语作为一个凝固的整体进行意义和用法说明的方法。与此相对，分析法就是对词语内部构成，词义的理据等进行分析说明的方法，此方法旨在使学习者清楚词义由来的内在根据，淡化对词语的陌生感，增强趣味性，提高对词语进行内部离析分解的能力，从而促进他们自主学习能力的提高。

(28) 日本語に存在するかどうかは、『三省堂国語辞典（第七版）』に依拠した。辞書に収録されていない語が存在する場合が考えられるが、日本語における一般語彙ではないと見なし、表７～表10においては、「×」とした。

(29) 同じ語形が日本語に存在する場合でも、語義の面で大きな差異が認められることがある。例えば表７では、“供应”と“照应”は日本語の「供応」、「照応」と意味の共通性は高くないが、このような例については、言うまでもなく同形近義語（異義語）として、指導において注意する必要がある。

(30) 同じ“累 lěi”でも、“积累”の“累”と表内の語の“累”とは語義の面でやや相違があり、辞書では別の意味項目に立てられることがあることにも注意を払う必要がある。

(31)“听”という簡体字が「聴」に相当するという字体の関係性についての知識が必要であり、この点では表内で同じ「○」が付いた“演

说”や“演奏”などと比較すると難しい事例と見なせる。

(32) また、このような日本語の語形にはない“也许”や“或许”の学習を通して、中国語の“许”には「～かもしれない」という副詞的に使用される意味・用法があるという語義面での内容も指導上は同時に注意して、強調する必要がある。

(33) 7節で示した提示法は、「逆引き辞典」の発想を参照したものでもあるが、同素反序語と「逆引き辞典」の関連性については、今後の課題として引き続き検討したい。

〈主要参考文献〉

北京・対外経済貿易大学、北京商務印書館編（2015）.『日中辞典（第三版）』小学館

北京商務印書館編（2016）.『中日辞典（第三版）』小学館

浅野雅樹（2011）. 類義語をどのように教えるか―弁別法の使用を中心に―『中国語教育』第9号、中国語教育学会、pp.133-157

荒川清秀（2018）.『日中漢語の生成と交流・受容―漢語語基の意味と造語力』白帝社

見坊豪紀、市川孝、飛田良文、山崎誠、飯間浩明、塩田雄大編（2014）.『三省堂国語辞典（第七版）』三省堂

竹中憲一（1988）. 中国語と日本語における字順の逆転現象『日本語学』明治書院 10月号、pp.55-64

中川正之（2000）. 鏡像語を作る2，3の要因『日本と中国ことばの梯：佐治圭三教授古稀記念論文集』くろしお出版、pp.287-296

馬雲（2014）. 日本語と中国語とで字順の逆転する二字漢語―日本語の漢語が中国語で逆転するものを中心に―『日本語研究』34号、首都大学東京・東京都立大学日本語・日本語教育研究会、pp.71-84

馬雲（2021）. 現代中国語における字順の逆転する二字漢語「AB―BA」の語彙的性質―現代日本語に「AB」のみある例との比較『國學院雑誌』第122巻第3号、pp.25-40

薄家富（1996）. 也谈同素异序词《天津师大学报（社会科学版）》第6期：70-73页

高燕（2008）.《对外汉语词汇教学》华东师范大学出版社

曹炜（2004）.《现代汉语词汇研究》北京大学出版社

方绪军（2008）.《对外汉语词汇教与学》北京师范大学出版社

胡玮（2015）. 同素逆序词及其对外汉语教学研究. 华东师范大学硕士学位

论文
李冰（2008）．汉日同素异序词对比分析—以《汉语水平词汇与汉字等级大纲》为中心《中山大学研究生学刊（社会科学版）》第29卷第 4 期：1－6 页
李爽（2016）．留学生同素异序词习得情况调查及教学对策．天津师范大学硕士学位论文
刘静、王志勤（2004）．现代汉日反序词的比较研究《西华师范大学学报（哲社版）》第 1 期：120-123页
刘枫（2007）．从 HSK 同素逆序词看对外汉语词汇教学《云南师范大学学报（对外汉语教学与研究版）》第 5 卷第 3 期：40-46页
林楠（2016）．日本留学生双音节汉日同素逆序同形词的习得顺序考察．华中师范大学语言与语言教育研究中心硕士学位论文
路涵（2016）．留学生习得同素逆序词偏误研究．黑龙江大学硕士学位论文
娄雪儿（2013）．汉日同素逆序词的对比研究及相关词的教学建议．上海外国语大学硕士学位论文.
陆建丽（2010）．对外汉语同素逆序词教学研究评述《语文学刊（高等教育版）》第10期：148-149页
马林峰（2019）．汉日同素反序词的对比分析《现代语文》第 1 期总第679期：141-145页
佟慧君、梅立崇主编（2002）.《汉语同义词词典》商务印书馆
万艺玲（2000）.《汉语词汇教程（三年級）—对外汉语本科系列教材》北京语言大学出版社
杨英耀编著（2003）.《同素异序词应用词典》珠海出版社
叶长荫（2001）．同素反序词及其在对外汉语教学中的应用《北方论丛》第 6 期：105-108页
曾立英（2021）.《国际汉语词汇教学》清华大学出版社北京交通大学出版社
张其昀（2002）．现代汉语同素词通考《语言研究》第 1 期：72-82页
中国社会科学研究院语言研究所编辑室编（2016）.《现代汉语词典（第七版）》商务印书馆
赵新、李英主编（2009）.《学汉语近义词词典》商务印书馆
朱志平（2014）．汉语双音复合词难易梯度的语义分析《面向第二语言教学的汉语本体研究》丁崇明，陈绂主编　北京师范大学出版集团